

棟方志功画伯と明専会

北九州市立自然史・歴史博物館 学芸員 富岡 優子

北九州イノベーション・インダストリー前館長

九州工業大学名誉教授 鹿毛 浩之

棟方志功画伯

棟方志功画伯（1903～1975）は、青森県出身の版画家です。

「わだばゴッホになる」と画家を目指すし上京しましたが、川上澄夫の作品を見て版画に目覚め、以後、版画家として歩み始めます。この頃、民芸運動を起こした柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎らの知遇を受け、大きな影響を受けました。

棟方画伯は自らの版画を板の命を彫り起こすとの意から「板画」と称しました。また板画の題には「柵」という字を用い、お遍路さんが寺々に納める回札のように生涯の道標を打つという意味を込めるなど、独特の言葉づかいをしています。

昭和27年（1952）スイス・ルガノ国際版画展で優秀賞を受賞したことを皮切りに、昭和30年（1955）ブラジル・サンパウロ・ビエン

ナーレで最高賞、翌年イタリア・ヴェネツィア・ビエンナーレでグランプリを受賞し、国際的な評価を受けました。昭和45年（1970）には文化勲章を受章し文化功労者となり、名実ともに、20世紀を代表する芸術家になりました。

生前は、メディアにもその動静がしばしば取り上げられたため、昭和40年代以前に生まれた方々はその姿を目にされたこともあったと思います。

『明専会報』の表紙絵

『明専会報』の表紙に棟方画伯の板画が使用されていたことをご存じの方もいらっしゃるかと思います。

画伯の板画が最初に登場したのは、昭和43年（1968）1月に発刊された437号です（図1）。大学構内の中庭にあった明専会の記念碑の写真（図2）を元に画伯が制作したもので、『明専会の柵』というタイトル



図1 『明専会報』437号



図2 『明専会の柵』の元になった写真

がつけられています。

表紙絵を依頼したのは当時、明専会常務理事で、『明専会報』の編集委員をされていた相良学教授でした。同号には相良教授が表紙絵を依頼した経緯について次のように記されています^①。

相良教授は、昭和42年（1967）5月に鎌倉にあった棟方画伯のアトリエ「雑華山房」を訪れ、表紙絵を依頼しました。すると画伯は「むかし安川さんが建てた立派な学校ですね」と快く引き受けてくれたといえます。そこで、相良教授は、大学内を撮影したスナップ写真10枚と明

専会の『50年史』を画伯に手渡し、これを参考に表紙絵を作って欲しいとお願いしたのでした。

表紙絵になった『明専会の柵』の原画が会員有志に安値で頒布されたことも『明専会報』に見えます^{①②}。本誌を読まれている方の中にお持ちの方がいらっしゃれば、是非、拝見させていただきたく、お願いする次第です。

なお、相良教授が表紙絵を依頼した際、九州工業大学が安川の建てた学校と画伯が存じだったのは安川電機との繋がりがからでした。

棟方志功画伯と安川電機

昭和27年（1952）2月、安川電機に勤めていた社員の一人が知人から棟方画伯を紹介され、画伯と懇意になりました。

この出会いを契機に画伯は安川電機の社員また重役・社長らと知り合うようになり、その縁から安川電機が海外に持参する土産用の板画や、福利厚生施設に飾る壁画などを制作するようになりました^③。

昭和29年（1954）1月に九州地区での初個展が小倉井筒屋にて開催された折にも安川電機が支援して

います。その後も画伯は安川電機との関係を深めていき、昭和33年(1958)には同社のカレンダーに作品が採用されました。これが好評だったため、昭和35年(1960)からは和紙に作品を印刷したカレンダーが作られ、画伯が亡くなった現在も安川電機の企業カレンダーには画伯の作品が使われています。このカレンダーの制作は今年度(2019年)で60回目となりました。

安川電機カレンダー制作の歴史の中で特筆すべきは、昭和46年度からはじまる海道シリーズで、画伯と安川電機の共同企画によりできたといえる作品群です。

これは安川電機がコーディネートする取材旅行を元に、画伯がカレンダー用の原画13点を制作し、何年かけて全国の海道シリーズを作るといふ壮大な計画でした。

安川電機には九州北部を題材にした《西海道棟方板画》、九州南部を題材にした《続西海道棟方板画》、四国を題材にした《南海道棟方板画》、奥の細道の道程を辿った《奥海道棟方板画》、《羽海道棟方板画》の原画



図3 創立者の胸像前の棟方画伯と相良学教授

65点が今も大切に保管されています。このように相良教授が棟方画伯に表紙絵を依頼した時には、画伯と安川電機はすでに昵懇の関係になっており、相良教授も安川電機を介して表紙絵を頼んだようです。

棟方画伯、九州工業大学に来る

棟方画伯は昭和45年(1970)5月10〜21日《西海道棟方板画》制作のため、福岡県を中心とする九州北部を旅しました。

画伯はこの旅の途中、5月11日の11時、九州工業大学にも立ち寄りま



図4 明専会館の庭を歩く棟方志功夫妻と相良学教授

す(4)。

相良教授によれば、棟方画伯は正門前、安川敬一郎などの胸像の前(図3)でそれぞれスケッチを行ったといえます。なお、このとき描いたスケッチは、現在も青森にある棟方志功記念館に所蔵されています。

棟方画伯一行はその後、庭のツツジが美しい旧明専会館(安川電機創業者の安川第五郎旧宅)(図4)に立ち寄り、西日本工業倶楽部を訪ねました。時間の制約がある中、当初の予定より長く、大学とその周辺を見学したとのこと(4)。

この年の11月、文化勲章を受章した棟方画伯の元に、相良教授は明専

相良教授によれば、このとき棟方画伯は九州工業大学でスケッチをしたものの作品が未だできていないことを、気にされていたとのこと(2)。

それから間もない、昭和46年(1971)1月、明専会に棟方画伯の作品が届きました。これが《九州工業大学正門の柵》で『明専会報』468号の表紙に使用されています(図6)。

この作品には「九州工業大学」と記された正門前でスケッチをする棟

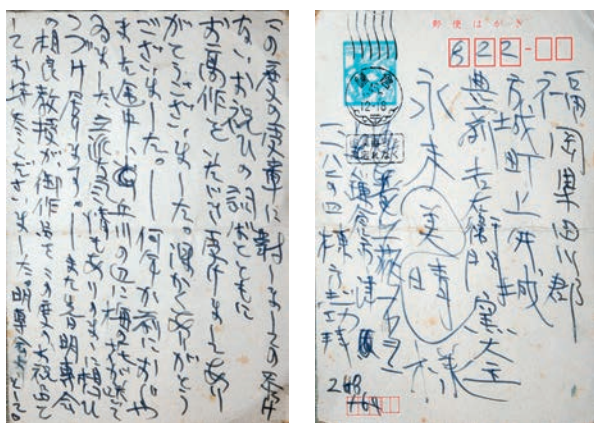


図5 棟方志功ハガキ(永末晴美宛)

会からのお祝いとして、豊前吉右衛門窯(福岡町弁城にある窯元)の陶器を持参したことが、窯元に残る画伯のハガキから分かりました(図5)。



図7 正門前でスケッチをする棟方画伯



図6 『明専会報』468号

方面伯と、それを傍で見る相良教授の姿が描き込まれています。同封された手紙には「使ふ使わないかは別といたしまして、この板画をわたくしの仕事として致しました」とあります⁽²⁾。

明専会には正門前でスケッチをする棟方画伯を写した写真があります

(図7)。468号の表紙と比べると、良く似ています。ひよっとすると画伯は正門でのスケッチとともに写真などを見ながら、相良教授との思い出を板画に加えたのかもしれませんが。

**明専会館の改築を祝い、
「安川第五郎先生に感謝する会」**

《九州工業大学の柵》が棟方画伯から送られた年、明専会館が改修されました。これを記念して「安川第五郎先生に感謝する会」が11月23日に開催されることになりました。

この記念に、相良教授は棟方画伯に作品制作を依頼します。それが明専会館に長く掲げられていた《御松鷹図》です。縦1・5メートル、横3メートルの大幅で、松の大樹にとまる鷹が描かれました。またこの作品とは別の作品を安川第五郎先生に贈呈すべく、準備が進められていたようです。

この絵は、当時の棟方作品の相場では考えられないような薄謝で描いて貰ったとのこと、当時、明専会の事務局で働いていた稲田璣子さんによれば、その領収書を書いてもらったのに、気が気でなかったといまいます。いわばボランティアのような形

で画伯は描かれたのでしよう。この絵を搬入した際の記念の一枚が、ネガフィルムで明専会に残っています(図8)。



図8 「御松鷹図」の前で記念撮影
写真左より相良学、美和弥之助、麻生元俊、稲田璣子

ここには、相良教授と稲田さんが写っています。安川電機のアート部門が古陶磁研究家でもある美和弥之助さん、当時安川電機資料課の麻生元俊課長も写っており、この図を棟方画伯に描いて貰う仲介に安川電機が入っていたことを示します。

また画伯は安川第五郎先生のためにサイズの小さい別の鷹図も制作しました。この絵を印刷したものが、明専会の有志会員に頒布されました。印刷は大日本印刷の福岡工場で行わ

れ、和紙に印刷された鷹図は一見すると本物のようで、非常に精巧にできています。

さて、画伯は、先述の「安川第五郎先生に感謝する会」に出席するため、わざわざ東京から戸畑に来られました。「明専会報」には当時の様子なども掲載されています⁽³⁾。

画伯は、この会の途中、同伴していた安川電機の社員の方を急ぎ立てるように中座し、下関の赤間神宮に向かいました。この機会に赤間神宮に向かうことを非常に楽しみにされていたようです。同行者については不明ですが、先の写真に写っていた方々かもしれません。

相良先生は、元々画伯を先導して一緒に赤間神宮を訪ねる予定でしたが、会を中座する訳にもいかず、会の終了後、急いで棟方画伯一行を追いかけたとのエピソードが残っています。

**「九州初！棟方志功の旅展」と
「いろ色ひろがる印刷展」**

北九州市では、文化庁の「博物館クラスター形成支援事業」の採択を受け、東田ミュージアムパーク実行委員会を設けて、2018年度から

2022年度までの5年間、北九州
市東田地区ミュージアムパーク創造
事業を実施しています。

この事業は、北九州市八幡東区東
田にある北九州市立自然史・歴史
(いのちのたび) 博物館を中核とし
て、環境ミュージアム、イノベーション
ンギャラリー、美術館、児童文化科
学館や世界遺産に認定された官営八
幡製鐵所など、各文化施設が連携し、
個ではなく、面・集合体による強み
を活かして、地域の活性化やインバ
ウンドの取り込みなどを実施するも
のです。

いのちのたび博物館では、令和元
年10月12日(土)～12月1日(日)に特
別展「九州発! 棟方志功の旅―彫り
起こされた足跡と交流―」展を開催
します(図9)。この展示の一部と
して棟方志功画伯と明専会との関係
についても取り上げさせていただく
予定です。

北九州イノベーションギャラリー
においても、東田ミュージアムパー
クの一環として、この展示に連携す
る企画展「いろ色ひろがる印刷展」
が令和元年10月12日(土)～12月22日
(日)の期間で開催されます(図10)。
この展示では現代の印刷技術の中

心に取り上げ、印刷の歴史、工場
の印刷、多種多様な色と紙から生ま
れるアートとしてのポスターも展示
します。色見本や特殊印刷、活版印
刷機に実際に触れられるコーナーも
設け、幅広い印刷技術についてご紹
介する予定です。

また、いのちのたび博物館、イノ
ベーションギャラリー等が連携する
さまざまなイベントが開催されます。
この秋は、是非とも東田地区に足
をお運びいただき、北九州市立いの
ちのたび博物館、そして北九州イノ
ベーションギャラリーの展示をご覧
いただければ幸いです。

〔謝辞〕

本稿執筆にあたり、稲田璿子様、
相良泰一様、永末修策様、棟方 良様
にご高配を賜りました。伏して感謝
致します。

写真

図2、3、4、7は明専会提供。
図8は稲田璿子氏提供。

引用文献

- (1) 相良学「棟方志功先生の表紙絵」、
『明専会報』437号、1968年。
- (2) 相良学「表紙絵とこのころの棟方
志功先生」『明専会報』468号、1971年。
- (3) 「座談会 安川電機と棟方板画カ

- (4) レンダー カレンダーに歴史あり」
『ROTOR』57、安川電機製作所
広報室、1971年。

- (5) えして「明専会報」461号、1970年。
相良学「平家七盛塚での法眼位棟
方志功」『棟方志功全集』12、講談
社、1979年、117～118頁。



図10 「いろ色ひろがる印刷展」ポスター



図9 「九州発! 棟方志功の旅―彫り起こされた足跡と交流―」展ポスター